

日蓮大聖人御書全集

じょうにんしょう

常忍抄

新版  
1334  
）  
1337

# 常忍抄

こうあんがんねん

がつ 10月1日

さい 57歳

富木常忍

おんふみ はいけんつかまつ そうら お

御文ほぼ拜見仕り候了わんぬ。

ごじよう い じょうにん い き く い こん う

御状に云わく、常忍云わく「記の九に云わく『権を稟け

て界を出ずるを、名づけて虚出と為す』と」云々。了性房

かい い な こしゆつ な うんぬん りようしろうぼう

い まった しやくな うんぬん

云わく「全くもつてその釈無し」云々。

き く じゆりようほん とこころ い こん う こしゆつ むかしこい

記の九へ寿量品の処へに云わく「無有虚出より昔虚為

じつこ いた い じ きよしよう こん う かい い

実故に至るまでは、為の字は去声なり。権を稟けて界を出

な こしゆつ な さんじよう みなさんがい い

ずるを、名づけて虚出と為す。三乗は皆三界を出でざるこ

にんてん さんず い

となし。人天は三途を出でんがためならざることなし。な

な こ な うんぬん もんぐ く い こしゆつ

らびに名づけて虚と為す」云々。文句の九に云わく「虚出に

じつ い ものあ ゆえ し

してしかも実に入らざる者有ることなし。故に知んぬ、昔

こ じつ ため きよしよう ゆえ うんぬん じゆりようほん きよう い

の虚は実の為へ去声の故なり」云々。寿量品の経に云

もろもろ ぜんなんこ によらい もろもろ しゆじよう しょうぼう ねが

わく「諸の善男子よ。如来は諸の衆生の小法を樂え

とくはく くじゆう もの み ないしもろもろ しゆじよう ないし

る徳薄・垢重の者を見て乃至諸の衆生は、もつて乃至い

はい うんぬん きよう もん う

まだかつてしばらくも廢せず」云々。この経の文を承けて、

てんだい みようらく しゃく

天台・妙楽は釈せしなり。

きようもん しょじようどう けごん べつえん ないしほけきよう

この経文は、初成道の華嚴の別円より乃至法華経の

しやくもんじゆうしほん

しやうぼう

い

とくはく

迹門十四品を、あるいは「小法」と云い、あるいは「徳薄・

くじゆう

こしゆう

とう

と

きやうもん

垢重」、あるいは「虚出」等と説ける経文なり。もししか

けこんぎやう

けこんしゆう

じんみつきやう

ほつそうしゆう

はんにやきやう

らば、華嚴経の華嚴宗、深密経の法相宗、般若経の

さんろんしゆう

だいにちきやう

しんごんしゆう

かんぎやう

じやうどしゆう

りやうがきやう

三論宗、大日経の真言宗、觀経の浄土宗、楞伽経の

ぜんしゆうとう

しよきやう

しよしゆう

えきやう

きやう

どくじゆ

禅宗等の諸経の諸宗は、依経のごとくその経を讀誦す

さんがい

い

さんず

い

もの

とも、三界を出でず、三途を出でざる者なり。いかにいわ

かれ

じつ

しやう

すぐ

とううんぬん

んや、あるいは彼を実と称し、あるいは勝る等云々。この

ひとびと

てん

む

つばき

は

ち

つか

いか

もの

人々、天に向かつて唾を吐き、地を蹴んで忿りをなす者か。

ほうもん

によらい

めつご

がっし いっせんごひやくよねん

この法門において、如来の滅後、月氏一千五百余年、

ふほうぞう にじゅうしにん りゅうじゆ てんじんとう し

付法蔵の二十四人、竜樹・天親等、知つていまだこれをあらわ

かんどいつせんよねん よにん

さず。漢土一千余年の余人も、いまだこれを知らず。ただ

てんだい みようらくとう

天台・妙楽等のみ、ほぼこれを演ぶ。しかりといえども、

じつぎ あらわ でんぎようだいし

いまだその実義を顕さざるか。伝教大師、もつてかくの

いま にちれん かんが ほけきよう

ごとし。今、日蓮、ほぼこれを勘うるに、法華経のこの文

かさ ねはんぎよう の い さんぽう い そう

を、重ねて涅槃経に演べて云わく「もし三法において異の想

しゆ まさ し やから しやうじよう さんき すなわ

を修せば、当に知るべし、この輩は、清浄の三帰に則ち

えしよな ごんかい みなぐそく つい しやうもん えんがく

依処無く、あらゆる禁戒をば皆具足せず、終に声聞・縁覚・

菩提の果を証すること能わず」等云々。この経文は正し

ぼだい か しやう あた とううんぬん きやうもん まさ

ほけきよう　じゆりようほん　けんぜつ

じゆりようほん

き　たと

に

く法華經の寿量品を顯說せるなり。寿量品は木に譬え、爾

ぜん　しやくもん

かげ　たと

もん

きようもん

あ

前・迹門をば影に譬うるの文なり。經文にまた、これ有り。

ご　じはつきよう

とうぶん　かせつ

だいしよう

やく

かげ

ほんもん

ほうもん

五時八教・当分跨節・大小の益は影のごとし、本門の法門

き

うんぬん

じゆりようほんいぜん

ざいせ

やく

あんちゆう

は木のごとし云々。また、寿量品已前の在世の益は闇中の

き　かげ

かこ

じゆりようほん

き

もの

とううんぬん

木の影なり、過去に寿量品を聞きし者のことなり等云々。

ふしん

ほうぼう

もう

い

また、「不信は謗法にあらず」と申すこと、また云わく

ふしん　もの

じごく　お

うんぬん

「不信の者、地獄に墮ちず」云々。

ご　まき

い

うたが

しよう

しん

すなわ

まさ

五の卷に云わく「疑いを生じて信ぜずんば、則ち當に

あくごう

お

うんぬん

悪道に墮つべし」云々。

総じて御心え候え。法華経と爾前と引き向かえて

しようにれつ せんじん ほん とうぶんかせつ さんようあ にちれん

勝劣・浅深を判ずるに、当分跨節のことに三様有り。日蓮が

ほうもん だいさん ほうもん せけん ゆめ いち に もう

法門は第三の法門なり。世間にほぼ夢のごとく一・二をば申

だいさん もう そうろう だいさん ほうもん てんだい みようらく

せども、第三をば申さず候。第三の法門は、天台・妙楽・

でんぎよう しめ ことお せん

伝教も、ほぼこれを示せども、いまだ事了えず。詮ずると

まつぼう いま ゆず あた ご ごひやくさい

ころ、末法の今に譲り与えしなり。五の五百歳はこれなり。

ほうもん ごろんだん よ うけたまわ そうろう かれ こう

ただし、この法門の御論談は余は承らず候。彼は広

がくたもん もの 憚 見 そうら

学多聞の者なり。「はばかり、はばかり。みた、みた」と候

ほう 負 もう

いしかば、この方のまけなんども申しつけられなば、いか

そうろう

んがし候べき。ただし、彼の法師等が、彼の釈を知り候

か ほつしとう

か しゃく し

そうら

そうら

ろくじつかん

もう

てん

わぬはさておき候いぬ、「六十卷になし」なんと申すは、天

責

ほうぼう

とが

ほけきよう

おんつか

あ

あらわ

そうろう

のせめなり。謗法の科の法華経の御使いに値つて顕れ候

なり。

さた

さだ

故

しゅつたい

また、この沙汰のことも、定めてゆえありて出来せり。

賀島

おおたじろうひようえ

だいしんぼう

ほんいんじゆ

かじまの大田次郎兵衛・大進房、また、本院主もいかにと

もう

聞

たま

そうら

や申すぞ、よくよくきかせ給い候え。

きようもん

しさい

ほけきよう

ぎようじや

これらは経文に子細あることなり。法華経の行者をば、

だいろくてん

まおう

かなら

さ

そうろう

じつきよう

なか

まきよう

第六天の魔王の必ず障うべきにて候。十境の中の魔境

これなり。魔まの習ならいは、善ぜんを障さえて悪あくを造つくらしむるをば悦よろこぶ  
ことそうろうに候し。強あくいて悪つくを造ものらざる者ちからをば、力およ及よばずして善ぜんを  
造つくらしむ。また、二乗にじようの行ぎようをなすものをば、あながちに怨あだ  
をなして善ぜんをすすむるなり。また、菩薩ぼさつの行ぎようをなすものを  
ば、遮さへぎって二乗にじようの行ぎようをすすむ。最後さいごに純円じゆんえんの行ぎようを一向いつこうに  
なす者ものをば、兼別等けんべつとうに墮おとすなり。止観しかんの八等はちとうを御ごらんあ  
るべし。覽

また、彼かれが云いわく「止観しかんの行者ぎようじやは持戒じかい」等とううんぬん云々。

文句もんぐの九くには初はつ・二に・三さんの行者ぎようじやの持戒じかいをばこれを制せいす。

きようもん

ふんみよう

しかん そうい

みようらく

もんどう

経文、また分明なり。止観に相違のことは妙楽の問答こ

あ き く み

しよずいき ふた あ

りこん ぎようじゃ

れ有り。記の丸を見るべし。初随喜に二つ有り。利根の行者

じかい か

どんこん じかい

せいし

しようぞう

は持戒を兼ねたり。鈍根は持戒これを誓止す。また、正像

まつ ふどう

しようじゆ しゃくぶく こと

でんぎようだいし

末の不同もあり。撰受・折伏の異なりあり。伝教大師の

いち とら

おも あ

市の虎のこと、思い合わすべし。

のち

しもうさ

ごほうもんそうろう

りようしよう

これより後は、下総にては御法門 候べからず。了性・

しねん 詰

うえ

た ひと ごろんそうら

返

浅

思念をつめつる上は、他の人と御論候わばかえりてあさく

か りようしよう しねん

としごろ

にちれん n

謗

なりなん。彼の了性と思念とは、年来、日蓮をそしると

承

かれ

ほど

ぶんぼう

もの

にちれんほど

ししおう

き

うけたまわる。彼ら程の蚊虻の者が、日蓮程の師子王を聞か

み 上 空 ほど 痴 人 てんだい

ず見ずして、うわのそらにそしる程のおこじんなり。天台

ほっけしゆう もの われ なんみようほうれんげきよう とな ねんぶつ

法華宗の者ならば、我は南無妙法蓮華経と唱えて念仏なん

もう もの もう 奇 怪

ど申す者をば「あれは、さること」なんど申すだにもきかい

なるべきに、その義なき上、たまたま申す人をそしるじよう、

不思議 なるべきに、その義なき上、たまたま申す人をそしるじよう、

不思議

あらふしぎ、あらふしぎ。

だいしんぼう 前々書遣 そろろう

大進房がこと、さきざきかきつかわして候 ように、

強々書あもう たま そらら だいしんぼう じゆうらせつ

つよづよとかき上げ、申させ給い候え。大進房には十羅刹

付 たま ひ返 たも そろろう

のつかせ給いて、引きかえしせさせ給うとおぼえ候ぞ。

まおう ししや 付 そらら 離

また、魔王の使者なんどがつきて候いけるが、はなれて

そらろろ

候とおぼえ候ぞ。

そらろろ

「悪鬼入其身」は、

あつきにゆうごしん

よもそら事にて

虚ごと

そらら

は候わじ。

ことごとおも

そらら

事々重く候えども、

つか

急

そらら

この使いいそぎ候えば、よるかき

夜書

そらろろ

きようきようきんげん

て候ぞ。恐々謹言。

じゆうがつついたち

十月一日

にちれん

日蓮

かおう

花押